二〇二二年度 同朋大学 文学部 学校推薦型選抜 (公募) 小論文 問題用紙

(解答はすべて解答用紙に記入のこと)

次の文章を読んで、 後の問いに答えよ。 $\overline{}$ $\overline{}$ は問題作成者が追記した個所である。

劇作家は、話し言葉を書くという特殊な職業だ。

対論、 話し言葉というと一般の方は「おしゃべり」を連想されるだろうが、 対話、会話、独り言、 叫び……など多岐にわたる。 (中略) しかし人間が「話す言葉」は、 演説、 スピーチ、 教授、

さて、これらのカテゴリーの詳しい分析は省くが、戯曲〔注:芝居の台本〕を書く上で最も重要なのは、「対話」と「会話」

を区別することだと私はこれまで考えてきた。

が極めて曖昧だ。 「対話」=ダイアローグと、「会話」=カンバセーションは、 英語では異なる概念だと思うのだが、 日本語では、 この区別

たとえば、手元の小学館の『大辞泉』を調べてみると

「会話」=複数の人が互いに話すこと。また、 その話。

=向かい合って話し合うこと。また、 その話。

ちなみに英語では、たとえば『ケンブリッジ英英辞典』によれば

conversation =a talk between two or more people, usually an informal one

(二人かそれ以上の間で話すこと、たいていは堅苦しくない)

dialogue =1, the talking in a book, play, or film

(本や演劇や映画の中での話し言葉)

2, a formal discussion between countries or groups of people

(集団や国家間の、 きちんとした議論)

となっている。 そこで私なりの二つの言葉の定義は、 以下のようになる。

「会話」 =価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。

摺りあわせなど。 「対話」=あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。 あるいは親しい人同士でも、 価値観が異なるときに起こるその

「『対話』と『対論』はどう違うのですか?」という質問もよく受ける

「対論」=ディベー トは、 AとBという二つの論理が戦って、Aが勝てばBはAに従わなければならない。 Bは意見を変え

ねばならないが、勝ったAの方は変わらない。

めに、 「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺りあわさり、Cという新しい概念を生み出す。AもBも変わる。 いずれにしても、 両者ともに変わるのだということを前提にして話を始める。 まずはじ

うに感じてしまうのかもしれない。あるいはそこに、敗北感が伴ってしまう。 だが、こういった議論の形にも日本人は少し苦手だ。最初に自分が言ったことから意見が変わると、何か嘘をついていたよ

「対話的な精神」とは、異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度のこと

である。あるいは、できることなら、異なる価値観を持った人と出会って議論を重ねたことで、自分の考えが変わっていくこ

とに喜びさえも見いだす態度だと言ってもいい。 ヨーロッパで仕事をしていると、些細なことでも、 とにかくやたらと議論になる。議論をすること自体が楽しいのだろうと

しか思えないときも往々にしてある。

三〇分ほどの議論を経て、 しかし、たいてい日本人の私(A)の方が計画的だから、 その「対話」の結末は、 Cというより

は、当初の私の意見に近い「宀」のようなものになる。そこで私が、

最初にオレが言っていたのと、 ほとんど変わらないじゃないか」

と言うと、議論の相手方(B)は必ず、

「いや、これは二人で出した結論だ」

と言ってくる。

だが、この三〇分が、彼らにとっては大切なのだ。

とことん話しあい、二人で結論を出すことが、何よりも重要なプロセスなのだ。

家の共通点は、粘り強く相手に説明することをいとわないところにあるように思う。日本では説明しなくてもわかってもらえ る事柄を、その虚しさに耐えて説明する能力が要求される。 わからないだろう」とあきらめてしまう。演劇に限らず、音楽、美術など、どのジャンルにおいても海外で成功している芸術 を見ていくと、日本の多くの芸術家は、この時間に耐えられず、あきらめるか切れるかしてしまうのだ。日本型のコミュニケ は、おそらくこの対話の時間に耐えられなかったのではないかと私は推測している。様々な舞台芸術の国際協働作業の失敗例 ーションだけに慣れてしまっていると、海外での対話の時間に耐えきれずに、「何でわからないんだ」と切れるか、「どうせ、 幾多の(おそらく私よりも明らかに才能のある)芸術家たちが海外に出て行って、 しかし必ずしもその才能を伸ばせないの

私はこの能力を、「対話の基礎体力」と呼んでいる。そして、 小中学校の先生方には、

「対話の技術は大学や大学院でも身につきますから、どうか子どもたちには、この『対話の基礎体力』をつけてあげてくださ

とお願いしてきた。

ていかなければならないだろう。 と。ただそれは、単に教え込めばいいということではなく、 異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけ出していくこ おそらく、そうした対話を繰り返すことで出会える喜びも、 伝え

意見が変わることは恥ずかしいことではない。いや、 少しずつ子どもたちに味わわせていく以外に、 対話の基礎体力を身につける近道はない。 そこには、新しい発見や出会いの喜びさえある。 その小さな喜びの体

(平田オリザ『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、 二〇一二年

右の文章のうち、 後半の線で囲んだ部分について一〇〇字程度で要約せよ。

右の文章全体を読んで、 これまでの自分をふり返り、 大学での学びについてあなたの考えを六○○字程度で述べよ。